

第236回くらしの植物苑観察会 2018年11月24日(土)

菊栽培の道具

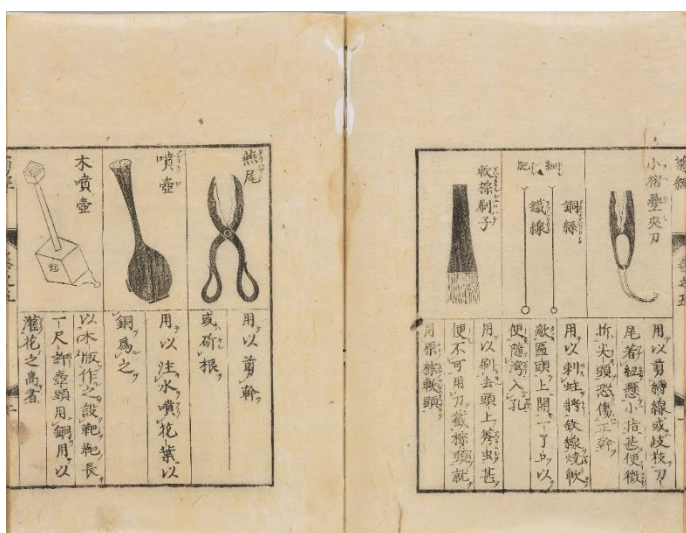
平野 恵 (台東区立中央図書館 郷土・資料調査室 専門員)

『菊経』に見る栽培道具 『菊経』は現代でも高い評価を受けている菊の栽培書。正しくは『黄龍公菊経国字略解』、略して『菊経』と呼ぶ。「黄龍」は作者、松平頼寛の号。『菊経』には6丁(現在の12ページ)にわたって栽培道具の図があり、簡単な解説を付す。



例え

ば、第2 ▲『菊経』宝暦5年(1755)刊(個人蔵)
丁表に



▲『菊経』宝暦5年(1755)刊(個人蔵)

は「噴壺」と書いてじょうろと読ませる道具が2種描かれる。両者ともに銅製であるが、左側の「木噴壺」は、背の高い花に水をそそぐためのものとある。

このほかずい虫を捕えるための金属製の棒や、用途に合わせた刀物が4種も描かれる。また、モグラ除けのための風鈴や、花壇の土固めに使う「鍬(しゃくし)」など、説明がないと用途がわからない道具もさまざま描かれている。菊の栽培書は、

この『菊経』をはじめ18世紀に数多くの版本(板木で印刷された書物)が刊行された。

浮世絵に見る栽培道具 ここでは、2枚の浮世絵から菊の栽培道具を見ていく。天明5年(1785)鳥居清長「六歌仙 喜撰法師」(個人蔵)は、庭の菊花壇の菊花の結付けや支柱建てが描かれる。右側に座って作業する女性は、菊花を藺線という藺草をやわらかくした糸で、菊の枝を支柱に結いつけている。傍らには腰掛と小刀が置かれ、小刀で藺線を切ること、疲れたら腰掛に座ることが予測できる。左側の女性は、支柱を格子状に組むための組紐と小ばさみを右手ににぎり、左手に支柱を構えている。傍らには手桶とひしゃくが置かれ、水やりの準備も万端である。藺線・腰掛・小刀・組紐・ひしゃく・手桶は、すべて『菊経』に記載がある。

弘化元年~2年(1844~45)の二代歌川国盛「五節文章 菊月の文」は、輪台・花受・小ばさみを背後に、女性が花受けを菊花に取り付ける様を中央に描く。背後の和紙の表現によって、四角い紙を小ばさみによって丸く切り抜き、切り込みを入れている様子がよくわかる。また、輪台と花受の図は、『菊経』にはなかったが、弘化3年(1846)刊の『菊花檀養種』にある、「はりかねにてつくる」「竹の切口へさす」などの文言と図によって用途がわかり、さらに浮世絵に描かれることによって、よく使用された技術であった点が検証できる。

以上のように浮世絵を栽培書の図解とならべることによって、どのように使ったかがより具体



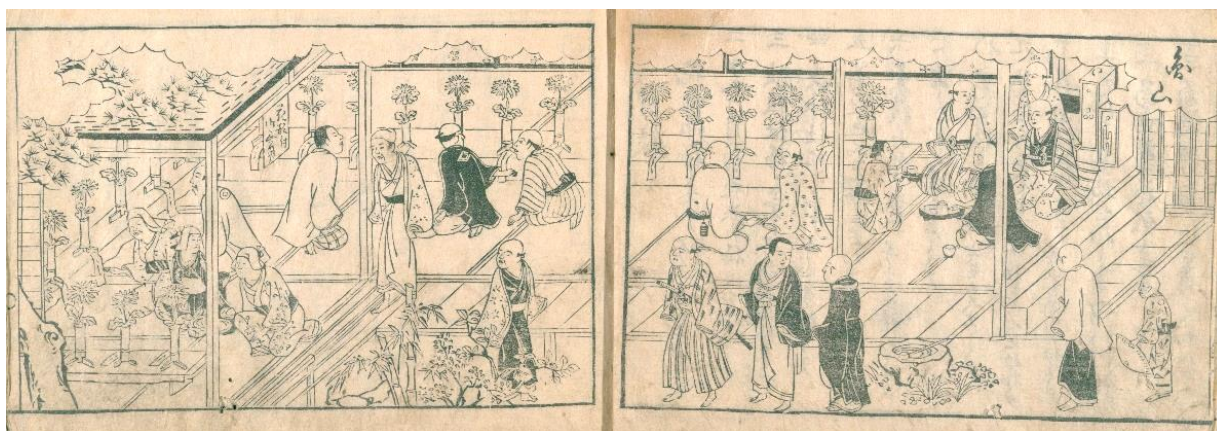
▲鳥居清長「六歌仙 喜撰法師」
天明5年(1785)(個人蔵)



▲二代歌川国盛「五節文章 菊月の文」
弘化元年~2年(1844~45)(個人蔵)

的にわかる。

品評会の流行とその道具 江戸時代中期には菊花の品評会が、京、大坂、江戸で大流行した。ただ



▲『花壇養菊集』正徳5年(1715)刊(国立国会図書館蔵)

し、朝顔や桜草と異なり、切り花の状態出品され、その輸送のための道具「箆筥」が開発された。『菊経』や『花壇養菊集』、『後の花』などに、箆筥のほか、品評会用の花器、投票用の札や壺の図もあわせて描かれている。

参考文献 国立歴史民俗博物館『伝統の古典菊』2015年

同『人と植物の文化史 くらしの植物苑が見せるもの』2017年、古今書院

.....

次回予告 第237回くらしの植物苑観察会 2018年12月15日(土)

「くらしの中のツバキとサザンカ」箱田 直紀 (恵泉女学園大学名誉教授)

13:30~15:30(予定) 苑内休憩所集合 申込不要